

**体育・健康**

■語る会に向けての検討の経緯：論点と提案■

第1回 5月25日 これからの見通しと役割分担 等

第2回 6月21日 園児・児童・生徒の実態把握 等

第3回 9月14日

○幼児・児童・生徒の実態から見た教科内容に関する情報交換及び問題点等
○教科で育てたい力、重点化したい内容、大切にしたい点、留意すべき点等
<p>&lt;幼稚園&gt; ・力や可能性を試したい。走る→飛びたい→引っ張る・ぶら下がる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・できないことへの挑戦→できた→次への意欲</li> <li>・心と体の逞しさが経験を通じて培われる</li> </ul> <p>◎体の発達に応じた力、社会性、人間関係力が経験（遊び・運動）を通して培われている。</p> <p>&lt;小学校&gt; ・体の発達に伴う学び方を通して心情面を養う。人間関係力を養う。・幼。小の連携は「からだ遊び」を通して可能なような気がする。</p> <p>&lt;中学校&gt; ・体格差が大きい。・技能的な大きな差は学年では見られないが、精神的な発達による満足度の差は見られる。（練習方法、ルールの追求など）</p>
幼稚園教育要領・学習指導要領・教科等における整合性や系統性、発展性等 共通する観点のつながりや発展性、繰り返して積み重ねるべき内容や導入すべき内容等
◎育成プランを心身の発達から考えてみる。
◎この時期にこの運動をするという運動群の整理。
「接続」に関わる課題の抽出
発達から、4-3-4の理由付けはしやすいのではないか。
次回の課題や今後の見通し等
次回までに簡単な育成プランを持ち寄る

第4回 9月26日

<p>○体育テーマについて 「なかまとともに たくましく追求する子ども」 ～心身の発達と学び方の変容をとらえる～</p> <p>前回のキーワードより探った</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あたたかい</li> <li>・たくましい</li> <li>・なかまとともに</li> <li>・チャレンジ</li> <li>・学ぶ意欲と学び方</li> </ul> <p>体育的なものを考えてサブテーマを入れこんだ</p> <p>○今後の見通しについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・10月11日に教科リード、指導案を原案提示し検討</li> <li>・運動カルテ とりあえず器械（体操）のものをピックアップする</li> <li>・スポーツテストの結果より <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国平均より全体的に劣っている（1年男子が特に）</li> <li>・2. 3年にあがるにつれて全国平均に追いついてくる</li> <li>・身長、体重ともに全国より小さい 特に体重←弁当の影響？</li> </ul> </li> </ul> <p>今後、分科会の役割分担や運動感覚の表を書き込んでいくこと</p>
---

○授業について

基盤の(1)(2)について話し合い

1年生の用具遊び 一貫教育としてのねらいは...

- ① 幼稚園児にこんなあそびをたくさん経験して欲しい
- ② なわをつかって、なわあそびを広げていく(なわなれ)
- ③ ひとつの課題へ向かってみんなで学ぶところが幼稚園と違うところ
- ④ 上へのつながりとして系統生をふまえる
- ⑤ つまづきがあればフィードバックしてこの運動を行えば感覚が作れるというものを考える

○リードについて

◎現状と課題

内容の流れとして

↓  
そこから体育科のテーマへ

なかまとともに運動の楽しさを  
追求する子ども  
一心身の発達と学びの変容をとらえる～

具体へ

- ① 授業で大切にすること
- ② カリキュラムの柔軟性
- ③ 運動カルテ(子どものとらえ)
- ④ 活動・行事とのつながり

第6回 10月24日

○リードの検討

- ・現状と課題 かかわり合いについて
- ・一貫教育の具体について

○学習指導案の検討

- ・授業の構想
- ・活動展開計画

第7回 11月8日

○学習指導案 最終検討

展開の工夫について(内的動機付けと外的動機付けについて)

○リードの誤字脱字及び語句についての共通理解

第8回 12月15日

◎今後の見通しについて

- ・具体的な活動としてあげた4つの柱を進めていく。
- ・それぞれに主任をおき中心となって進めることとする。
- 授業づくり(運動感覚づくりとかかわりを増やす授業モデル)  
今回の授業を中心にふりかえりを行う。多分集録をつくることになるため、そのまとめ作業を行うとともに、初等部後期の授業モデルと中等部の授業モデルが必要となろう。
- カリキュラム(一貫のよさがみえるカリキュラム作成)  
すべてのカリキュラムをつくるのは無理があるため、領域をしぼって行う。一貫のよさ(指導の一貫性など)をいかした領域(ボールや器械)などの提案をしていきたい。
- 体育的活動・行事(今行っている活動をつなげる)  
今ある行事や体育的活動をつなげたものを来年度から展開していきたい。体育会の30秒レース・校内マラソンの共同展開などを考えたい。
- 運動カルテの作成(一部を来年度試行的に行いたい)

## 幼小中一貫教育に向けて（体育・健康）

### 1 現状と課題

これまで、附属学校園では各園，学校ごとに体育科・保健体育科指導計画を立案し，下記のことを重点として実践研究を深めてきた。

幼稚園・・・主に遊びを通してみんなで一つのことに向かっていくこと，いやなことでも挑戦しようとする事，もう少しでできそうなことを目標とする。

小学校・・・各運動特性を追求していく中で，友だちとのかかわり，学び方を大切にしたい授業の展開。

中学校・・・グループ学習でのかかわり合いを大切にしたい授業の展開，効果的な選択制授業の進め方，選択制を効果的に取り入れたカリキュラムの研究。

これらの取り組みを通し，幼稚園では子どもたちが生き生きと活動するようになっている。また，小学校ではほとんどの子どもが体育を好きになり，運動のコツを見つけようとしていたり，ルールや作戦を工夫したりして積極的に授業に取り組む姿がみられている。そして中学校では，器械運動等で仲間と協力し合いながら運動に取り組み，補助し合ったり，アドバイスを送り合ったりする等，真摯に学び合う関係が形成されている。その他，体育的行事や部活動などの学校教育全般を通して，健康づくり体力づくりに努めようとする子どもの育成に取り組み，一定の成果を挙げてきている。

しかしながら，現在の子どもたちを取り巻く社会環境は大きく変化し，この変化は子どもたちの，体力・技能・志向・かかわり合い方などに大きな影響を及ぼすようになっている。一般的に，生活環境や生活習慣の変化による運動機会の減少から，次のような課題が指摘されている。

(1) 11歳の基礎的運動能力及び体格について20年前と現在を比較すると，「身長」，「体重」は男女とも20年前に比べ向上しているが，「50メートル走（走力）」，「ソフトボール投げ（投力）」，「持久走（持久力）」は低下している。

→技能・体力の低下

(2) 11歳の運動・スポーツの実施頻度別に基礎的運動能力について20年前と現在を比較すると，運動実施頻度に関わらず体力は男女とも低下している。また，「ほとんど毎日（週3日以上）」運動する群は，男女とも20年前と比べて体力の低下の度合いが小さいが，運動実施頻度の少ない群は，体力の低下の度合いが大きい傾向を示している。

→運動実施の二極化

(2) 身体を動かす遊びの減少（時間・空間・仲間）から，身体を思い通りに動かす能力の低下と友だちとうまく関わるできない子がいる。

→かかわりの希薄さ

附属学校園においても同様な課題が見られる。さらに中学校では，集団行動で問題のある生徒が目立ってきている。小学校では運動経験の少なさから，今まで日常的に身に付いていた運動感覚が身に付いていない子どもが増えている現状がある。

### 2 幼小中一貫教育に向けて，大切にしたいこと

そこで，こうした課題を克服するために，次のような3つの考えを基本とし，一貫教育

のよさをいかしながら教育課程を編成し直していこうと考えた。

#### (1) 体力・技能の向上

体育科・健康において、体力と技能は欠かせない要素である。11年間を見通し、系統性のあるカリキュラム作成や、自分の記録の伸びがわかる工夫、発達段階に応じた学び方の深まりをとらえながら授業をすることで、体力と技能の伸びを期待できるであろう。

#### (2) 運動の楽しさや必要性を感じさせる指導の工夫

初等部前期では、「やさしい運動」「やってみたいと思う運動」を大切にしながら全力で運動へ取り組ませること。後期や中等部では、自分の体力や技能を知り、めあてをもって自主的に運動へ取り組ませることで、運動に親しみを感じ、生涯を通じて運動に取り組む姿を期待できるであろう。

#### (3) 友だちとのかかわり方を重視した授業づくり

友だちとのかかわりあいを重視した授業を展開することで、学習場面はもちろん、それ以外における場面で、運動へ向かう意欲の向上が期待できるとともに、日常的に身につく運動感覚も養われるであろう。

### 3 取り組みの具体

#### ○ 授業で大切にしたいこと

多様な運動あそびを通して運動感覚づくりを行う。また、たくさんの運動経験から、つまづきがあった場合はフィードバックできるようにすることが重要であると考え。さらに、発達段階を見通した学習の系統性を重視したり、学び方を学ぶということも大切にしたりした授業を工夫したい。

#### ○ 弾力的なカリキュラム

学び方の深まりをとらえ、その発達段階に応じたカリキュラムを作成する。例えばボール運動では、ボール運動の型から種目を選定し、それぞれの学年に位置づけることで、技能の定着と、学び方の系統性も考えていく。

#### ○ 体育的行事・活動のつながり

幼稚園・小学校・中学校それぞれで、子どもたちの心身の発達を願い、独自に体育的な活動を多く行ってきた。今ある体育的活動と体育的行事を幼・小・中と可能なところを継続的に実施して、発達段階を越えた成長の見通しをもって各学校園での行事に取り組めるようにする。例えば、それぞれの体育会における種目・校内マラソン大会・なわとびなどを継続的に実施することが考えられる。

#### ○ 運動カルテ（仮称）の作成

幼・小・中と一貫した運動カルテ（仮称）を準備したい。このカルテの記録から、一人ひとりの技能や体力をとらえることができると判断する。さらにこのカルテは、必ず行わなければならない運動群をファイルできることから、指導内容の均質性を保証し、指導の一貫性を図ることにもなろう。また子ども自身が自分の記録を知り、目標をもつことや自分自身の体力を知る手がかりとなると考える。

# 小学1年2組 体育科学習指導案

指導者 荏田幸浩

## 1 単元名 とべ！なわレンジャー ～「用具を操作する運動あそび」～

### 2 授業の構想

(1) きょう、なかにわでDちゃんと、うんていをしました。ずっとずっとやっていたから、てがまっかになりました。わたしは、せんせいみたいにたいそうがじょうずになりたいです。もっともっとれんしゅうして、9こやりたいです。Eくんはてにまめがいっぱいできています。たのしかったです。 A児

1の2の子どもたちは、友だちと一緒に体を動かすことが大好きである。さらに、遊びの中にも目標を決めてその運動へ取り組もうとしていることが窺える。中庭にある遊具は子どもたちにとって魅力的である。このことから、「いつも目にしている環境」、「友だちと一緒に運動すること」そして「挑戦意欲をかきたてる適度な課題」などが運動へ向かう姿勢をつくりだすと考える。

せんせいあのね。きょうの3じかんめが大すきなたいいくがなくなってやだったです。なくなったのはようちえんのこうつうあんぜんきょうしつだったからしかたないです。またみんなでぼーるのたつじんのべんきょうがしたいです。 B児

この日記にもあるように1年2組の子どもたちは、体育の授業を楽しみにしている。体育のどこが楽しいのか訊いてみたところ、「自分の力がためせる。」とか「みんなが楽しそうにやっているから自分も楽しい。」などの答えがかえってきた。みんなでする運動という考えは、いわゆる「学び合い」という形で友だちとの関係が学習の中で築き上げられていることや、一つの学習課題にみんなで向かっていくことの楽しさを感じているといえる。よって1年生の学習期においては、友だちと学び合う楽しさを十分に味わわせたいと考えている。

せんせいあのね。きょうのじゅぎょうでいちばんたのしかったのはたいいくです。わたしは、まえはぜんぜんはいらなかったけどきょうのコツをまねしたらはいりそうになりました。これからもまねしたらはいるかな。 C児

これは、「バウンドボール」(ボールをバウンドさせて、ゴールへ入れるゲーム)の授業後の日記である。なかなか入らなかったC児が、上手な友だちを見つけ、まねしてみたら入りそうになったという気づきである。そして、次時への意気込みも窺える。

このように、発達段階に応じた「なんとなくできそうだな」とか「やってみたいな」という運動は必ず存在する。子どもたちの様子や実態をよくとらえることで、子どもたちがいきいきと活動していくことは明らかである。上記にもあるように、もう少しできそうだという感覚が続く限り、運動へ挑戦する意欲も持続する。この繰り返しは低学年のみならず、大事にしていかなければならないことであろう。また、1年生期において詳しく運動の構造を見抜くことは難しい。そのため思考面では、簡単な運動のやり方や運動をまねるということに重点をおき、学習を展開することが必要であろう。

なわとび技能についてのレディネスは別紙資料(当日配布)の通りである。全体的には、跳べる子と跳べない子の差が大きいこと。挑戦する意欲が高いこと。そして、跳べるために必要なことは何かなど考えることができる子が多いということがあげられる。

1年生は今までの幼稚園・保育園の健康や表現といった領域から、体育という教科へ学びを確立させていく第一歩(外的要因からの動機付け・共通の運動への没頭・友だちと共に学ぶ)という時期であることがいえる。また集団で学ぶための意義や、一緒に運動する楽しさが感じられる時期でもある。そこで、今回は「やってみたいな」という思いから「なんとなくできそうだ」という思いを大切にしたい展開としたい。

(2) なわとびは、「跳ぶ回数の増加」や「新しい技の習得」といった進歩の度合いを自分自身で感

じることができるため、意欲的に取り組むことができる運動である。さらに、跳ぶことで持久力や回すことと跳ぶことのタイミングをとることができるため、巧みな運動感覚を身につけることができる運動ととらえている。

なわとびが跳べるようになるためには、下記の通りたくさんのポイントがあり、その運動経験の積み重ねによってなわとびができるようになる判断する。また、低学年の動きづくりに欠かせない「まねる」という運動要素（同じ動作の繰り返し）を多く含んでいるため、低学年の体育科において、コツをみつけさせる場面を設定しやすい運動教材であると考えている。

#### ○なわとびが跳べるようになるための運動感覚ポイントのとらえ

- ・ なわに慣れる（なわすべり・なわわりなどのなわをつかった運動）
- ・ ジャンプの連続性（ジャンプの先取りと着地の先取り）
- ・ なわ回し（なわ回しとジャンプのタイミング）

なわとびがとべない理由は多くあるが、大抵初心者は、ジャンプと同時に腕が振り上がる。これによってジャンプと回すタイミングがずれ、うまく跳べないことが多い。また、なわを使うことに慣れていないため、なわの状態（位置やたるみ）を感じるとうことができないこともあげられる。よってこのような感覚を養うために、様々な運動を経験させることが大切となる。また、10回程度跳べるようになってくると、新しい技への挑戦欲求がわき、そこから技の広がりも期待できる。

そこで本単元では、スムーズに短なわが跳べるようになることと、友だちと多くのかかわりをもちながら、動きのコツをみつけることができることをねらいとして設定する。尚、幼稚園教育との接続で大切にすることは、一つの課題をみんなで追求していくために、具体的なめあての設定を行い、運動を意図的にまねる場面の設定や、友だち同士のかかわりあいを多くする場面を増やす枠組みを工夫することである。さらに意欲的に取り組ませるために、評価言などはたらきかけの工夫も行う。

(3) これまで小学1年2組の体育科学習では、教師からの提案が多く、子どもたちに場の選択をさせたり、練習方法を考えさせたりする場面が少なかった。しかし、学びのルールを知ったり、この運動では何がコツなのか考えたりするこれまでの学習を通して、学びの深まりがみられるようになってきた。そこで今回は、自分自身に追求する技を選ばせ、お互いに見合ったり、教えあったりする場を組み入れる。技については、前跳び・あや跳び・交差跳び・2重跳びの4種類として、それぞれに後ろ系の技が入る。10回跳べることがクリア条件となり、さらに新しい技へ挑戦していくという展開とする。

第1次では、なわとびの色々な技と出合わせる。小学1年2組の学級の跳べる子が師範をすることで、技を自分たちもできそうだという思いをふくらませ、意欲をもって取り組むようにしたい。どの技でも「両足でジャンプすること」と、「なわをまわす」という動きは共通するため、ここを共通の動きとしてみつけさせる。そして今後その動きをゲーム化し、2つの運動感覚を養いたい。

第2次では自分の挑戦したい技を選択し、挑戦させる。跳ぶことを通して、その技のコツを見つながら挑戦させたい。そのためにコツをメモできる紙を用意し、気がついたことがあれば、記入できるようにしておく。また10回跳ぶとその技をクリアした証として、〇〇レンジャー腕輪がもらえる。多くの腕輪をもらえるように意欲的に挑戦してほしい。

第3次では、お互いにかかわりあって技の習得をめざすことに重点をおく。それぞれの腕輪をつけている人にコツを教えてもらいながら〇〇レンジャーになれることをめざす。ここでは、第2次でみつけたコツを共有しながら、教え合えるように、コツをみえるように提示しておきたい。最後それぞれの技ごとの跳びを披露し、自分や友だちの進歩を知ることでもまとめとしたい。また、休み時間にも〇〇レンジャーをめざして、自ら追求していく姿を期待する。

本時は個人でコツ見つけをした後の、みんなで教え合いながら技を習得していく場面である。まず第1次で共有した、「両足で跳ぶ」ということと「回す」という動作をゲーム化した「カンガルーおにごっこ」を通して、なわとびの感覚づくりを行う。次に技を教えあう場面だが、子

もたちに活動をまかせ、10回跳べるようになるために何回も練習する姿を期待したい。

### 3 活動展開計画 (全6時間 本時5/6)

次	主な活動計画	時	具体的な学習活動
1	なわとびの技の種類を知って共通の動きを見つける	1	・友だちの技をみて、どんな技ができるのかを知る ・自分の挑戦してみたい技をきめ、挑戦する
		2	・なわとびの技に挑戦しながら、共通の動きを見つける
2	自分のめざす技にコツをみつけながら挑戦する	3	・なわまわしリレーをする ・カンガルーおにごっこをする
		4	・自分の挑戦したい技に挑戦しながらコツを見つける ・みつけたコツを発表する
3	友だちとコツを教え合いながら一緒に〇〇レンジャーをめざす	⑤	・運動感覚づくりを行う (リレーやおにごっこ) ・みつけたコツをみんなで共有する
		6	・教えたり、教えてもらったりしながら、技がよりよくできるように練習する

### 4 本時の学習

#### (1) ねらい

友だちに教えたり教えてもらったりしながら、自分の挑戦する技を10回跳ぶことができる。

#### (2) 展開

学習場面と子どもの取り組み	教師のはたらきかけと願い
1 カンガルーおにごっこをする ○ たくさんつかまえるぞ ○ 両足そろえてのジャンプが大切なんだな  2 本時のめあてと流れを知る	・一人でも多くつかまえることができるように、またにげきれるように、得点制にする。 ・両足をきちんとそろえてジャンプしている子を認め、紹介する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;">             みんなで1の2なわレンジャーになろう・ふやそう           </div>	
・今までの学習のふりかえりと本時の意欲付けを行う。 ○ たくさんのコツをみつけてきたな ○ なわレンジャー腕輪をつけている友だちがふえてきたな ○ 今日は新しいレンジャーになるぞ  3 〇〇レンジャーめざして練習する ・ここまでの子どもたちの実態をとらえ、2つ、または3つの場を用意し、かかわりを重視しながら練習させる。 ○ 今日はあや跳びレンジャーをめざすぞ ○ こうやって教えたらわかりやすいかな  4. ふりかえりをする	・今まで子どもたちがみつけてきたコツをもう一度想起させるために、虎の巻として見えるようにはしておく。 ・子どもたちの今までのがんばりを認める評価を行う。  ・子どもたちの挑戦したい技をあらかじめ把握し、場の設定をしておく。 ・教え方の上手な子を紹介し、どうやったら友だちが上手になるのか考えさせる。 ・今までのコツを思い出させながら挑戦するように促す。 ・友だちから言われたこの一言がうれしかったことはじめて10回とべたなどの感想を期待する。

## 一貫教育を語る会

### 体育・健康

#### ◎ 授業について

附属小学校 1年2組 「とべ1の2なわレンジャー —用具あそび—」

1年生期においてどこまで友達と関わりながら、自分のなわとびの技能をのぼすことができるのかということ、一貫教育の柱としてこの授業に取り組んだ。ねらいは、「6つの技（前・後ろ・けんけん・あや・こうさ・2重）を10回程度スムーズに跳ぶことができること」と、「友達と教え合いながら、それぞれの技のコツをみつけることができる。」とした。

上記のねらいを達成するために次のことにポイントを置き、授業の枠組みとはたらきかけを行った。

#### ○ 枠組みの工夫

- ① 子ども達自身の技能や環境に近いところからの題材を選定し、対象と出会う場を工夫する。
- ② 書く活動を効果的に取り入れ、分かり合う場を活性化する。
- ③ かかわり合いを重視したまかせる場を設定する。
- ④ ふりかえりの場をチャレンジタイムと置き換え、自己への気づきと次時への見通しをもたせる。

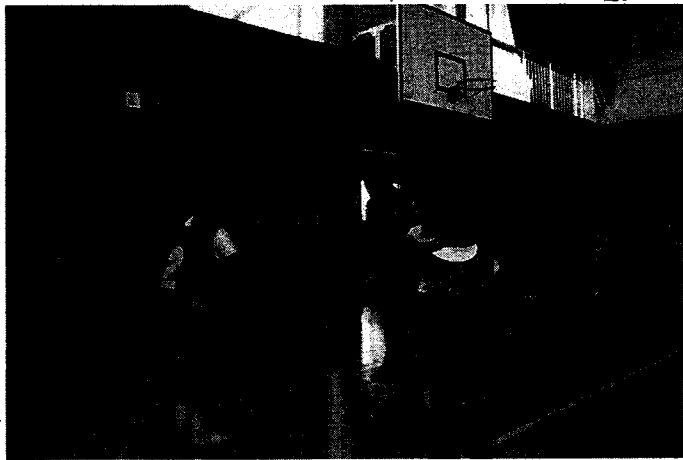
#### ○ はたらきかけの工夫

- ① 運動の外的動機付けと内的動機付けのすりあわせを工夫する。
- ② 「なんとなくできそう」の連続を保証する。

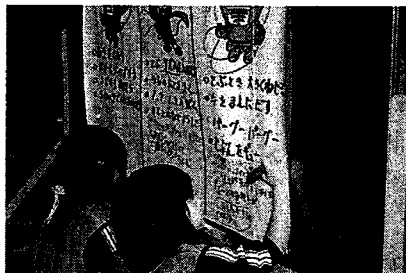
#### 枠組みについて

##### ① 子ども達自身の技能や環境に近いところからの題材を選定し、対象と出会う場を工夫する。

1年生の体育学習においては、初めて経験する運動感覚というものが多い存在する。そんな子どもたちに「なわとびをします」では乱暴すぎる。そこで今回の単元に入る前に、両足ジャンプを多く経験させた。子どもたちには「カンガルージャンプ」という名称で、おにごっこやジャンケンを通じて両足ジャンプの感覚をつかんでいった。この両足ジャンプは、実際幼稚園時には1回も跳べなかった子が、なわとびの学習に入ったとき、いきなり10回とべたことから、今までなわとびが跳べなかった子に対して非常に有効な手段であったことが窺える。また、「スネークリレー」として、なわまわしをしながらのリレーを行った。回しと両足ジャンプの2つを中核技術ととらえ、2つの動きを共通理解した上でなわとびの学習へとつなげた。



##### ② 書く活動を効果的に取り入れ、分かり合う場を活性化する。



共通の運動感覚と動きのコツをつかんでいたため、なわとびに必要な基本的なもの（両足のジャンプとなわの回し）はほぼ全員が認識できていた。今回は6つの技を追求する単元であったため、その基本的なコツの上にそれぞれの技に必要なコツを付け加えていくようにした。実際ははたらきかけのところで詳しく述べるが、子ども同士で認識できる言葉や共通の感覚を体験した者でなければわからない言葉が見つかった。体育ノート



の活用と、全員で見ることが出来る「なわレンジャー変身巻物」でコツをさぐり、お互いにアドバイスしながら練習を進めることができた。

③ かかわり合いを重視したまかせる場を設定する。

④ ふりかえりの場をチャレンジタイムと置き換え、自己への気づきと次時への見通しをもたせる。



今回の一貫教育の授業の柱として、かかわり合いをあげている。1年生においてどこまで共通の学習課題についてお互いにかかわって学習を展開できるだろうかという思いがあった。まだ個の追究に慣れていないため、なわとびを跳ぶ回数を数えたり、コツをアドバイスとしていったりする時間を十分にとった。学習課題が明確であったことや、意欲が高まっていたために課題からそれることなく、なわレンジャーの変身をめざして運動することができていた。また、授業中や後半にチャレンジタイムを設定した

ことも、意欲を高める一つの手段であった。だれもが変身をめざして、それまでの成果を試すことや次への課題を見つける時間として有効であった。「個は他とつながって強くなる」という言葉が示す通り、自分の運動感覚を養うためには自分の動きを認識することが必要となり、そのためには他者が必要不可欠となる。このことは運動課題を共有化できたときに成立する条件であり、教師が授業の枠組みで大切にしなければならないことである。

はたらきかけについて

① 運動の外的動機付けと内的動機付けのすりあわせを工夫する。

1年生期において、運動の内的動機であるやってみようという思いはかなり高いが、この時期においても「できる」と「できない」が自分自身で判断でき、運動へ向かう志向が高まっていけない子も存在する。ここで外的動機が必要となる。今回は、なわレンジャーに変身しようということと変身できると腕輪をもらえるという動機を与えた。腕輪は技に応じた6種類が存在し、一つをクリアしても、次をめざせるものとして効果的であった。誰もが6つもらおうと必死になって運動する姿をみることができた。低学年において、運動へむかわせるための外的動機と「なんとなくできそうだ」という思いを連続させるための適度な学習課題を組むことが必要である。

② なんとなくできそうだの連続を保証する。

なんとなくできそうだという思いにあることを「なじみの地平」とよぶ。この感覚を持続させていくことが、体育学習において技能の伸びと運動へ向かう意欲を高める。この感覚は、あらゆる運動感覚の経験において養われるものである。いうまでもないが、1年生期、さらには幼稚園期においてたくさん運動感覚を養っていくことが重要なことである。今回も両足ジャンプをひたすら行った。またなわ回しも短いなわを使用し、前と後ろを経験させた。この分習から全習へのつなぎを運動の先取りがあらかじめできるようにしておくことが、運動成功のイメージを作り上げる。そして、この運動成功が自己の有能感を高め、次への運動を誘発する。

◎当日の様子と分科会からの提言

○かかわり合いを重視するためには、場の工夫とグループ構成の工夫が必要

グループを追求する技での編成とし、それぞれにこつの書いてある紙をおくことでより深まるのではないか。

○技の順序性について

1年生のなわとびにおいて、どの技の難易度が高く、どの技から練習した方が効率的か。子どもたちの実態をより把握し、その系統をさぐっていくべきである。

## 質疑応答・意見交換

- ・ミニマムをどの学年で身につけさせるのか? 1年生段階から中学校教育へも見通しての構想は?  
→ケンケンとびは子どもから出てきた技。ここまでは多くの子ができる。あやとび・交差とび・二重とびはもう1つ上のレベル。前回しと後ろ回しが均等にできるようになってからの技である。あやとびと交差とびは、子どもが自分の言葉でコツをみつけやすい。二重とびは、次の段階へつながるような思いで設定した。2年生でできれば二重とびができるとよい。そこからは、技の組み合わせ・持久性の探究・ジャンピングボードを用いた高度な技へと発展させていく。また、中学校では、旧指導要領下では3~4時間の単元で、なわとび検定を実施していた。現行の指導要領になってからは「体力を高める運動」の単元の中で扱っている。
- ・6つのグループは、どうやって決めていったか?工夫を知りたい。  
→グループ構成の工夫としては、「動きはできないがアドバイスができる子」「動きができる子」を同一グループの中にちりばめた。同質性グループも試してみたが、子ども同士の関わりが薄そうだったので、異質グループに変えた。本当は、もっと少人数のグループにしたい。
- ・両足ジャンプという課題があったが、経験させたい動きをゲーム化する際に粗さがあったのではないか。  
→ゲーム化することでねらいとする運動が粗くなるのは悩みである。ルールづくりでその解決をねらっている。ゲーム中のよい動きをとりあげて紹介している。ゲームでは楽しさを重視している。
- ・単元構成の工夫は?  
→単元構成にあたっては、当初、短なわとびと長なわとびの組み合わせを考えていたが、単体の単元の方が1年生には向いている。
- ・運動感覚づくりの下位教材づくりがいい。運動の日常化もできている。授業の最初に行うゲームは、リレーがよかったかどうか?膝を深く曲げてとぶ子がいた。それをどう修正するか?例えば、音を聞かせたりして自分の動きに気づかせる。その上でリレーをするという方法もある。
- ・リズム打ち(拍手)を聞きながら運動感覚づくりもできる。その際、スネークリレーで使用するなわの長さや重さの工夫が必要となる。
- ・子ども同士の関わりをもっと促すためにはどうしたらいいのか?動きのコツを書き込むボードをそれぞれのグループの場に置くなどしてはどうか。また、声かけを促したり、ボードの活用方法を考えてもよいのではないか。
- ・子ども同士の関わりかとして、具体的にどんな姿を思い浮かべていたか?  
→理想としては、「仲間がとぶ回数を数える」「仲間のとぶ動きを見る」「仲間に動きの様子を言ってあげる」などの姿がほしかった。そのような姿が自然に発生するのを待つだけでなく、学び方を教えることが必要である。
- ・ボードに書いてある動きのコツを記した言葉がヒントになる。それができているかどうかを判定することが必要である。教師の方から技のポイントとなる部分を取りあげて提示すべきである。
- ・あやとびと交差とびの学習は事前に運動をやっておかないと難しい。また、その際、なわの適切な長さはどれくらいか?また、運動課題の提示の順はどれからが適切か?  
→65cmの長さのなわがまわせないならば、もっと長いなわを使うのは無理である。その際、なわには柄がない方がやり易い。また、運動課題の順は、あやとびから先に学習する方がやり易い。なわのよじれなどは、特に交差とびの学習の場合、影響がある。
- ・手首の運動感覚の習得状況によっては、固定の方がよい場合もあるのではないか?  
→下位教材にはいろいろある。あげればキリがない。幼稚園段階でそういった経験を積ませたい。
- ・まず運動に没頭するということがあってから、友達との関わりが生まれるのである。学び方を引き出すための場の工夫が必要である。学習規律や学び方も含めた約束づくりも子どもと一緒にいき、それを掲示物などを使って、子どもに見えるように示すことが必要である。そして、技能だけでなく態度や学び方においても真のなわレンジャーをめざすことが大切である。
- ・1年生の特徴として、先生=大人に見てほしいという気持ちがある。保護者の協力も求めながら、そういった気持ちをしっかりと受けとめることが大切である。
- ・ボードに動きのコツの成否を書き込めるスペースがあるとよい。学習の成果が見える工夫が必要である。
- ・幼稚園・小学校・中学校を通した運動カルテの工夫はよい。一貫教育の中で、前の学校段階から引き継いだことをしっかり受けとめることを大切にしてほしい。
- ・学習の規律が目につく。子どもを学習活動にひきつけることの工夫も必要である。学習課題に目を向けさせる工夫やメリハリをつけた学習の展開が大切である。